

---

# オトシモノ

のみのみの

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

オトシモノ

### 【Nコード】

N1419M

### 【作者名】

のみのみの

### 【あらすじ】

高校のとある事件から始まった『オトシモノ』を廻る闘争。様々な人の思案が絡み合い、物語は大きく広がっていく。そこにあ  
る正義を信じて。。。登場人物が多いですが、適宜まとめますの  
でご了承ください。

## プロローグ

私はこのノートに今回起こった事件の顛末を書き記そうと思う。関係者からの伝聞の内容が多々あり、全てを書ききることは難しいかもしれない。

しかし、このような事が二度と起こらないよう、切に願う。

## プロローグ

物語は6月1日の早朝から始まる。

その日、高校の新聞部にある一通の手紙が届いた。

B5程の白い紙に週刊誌から切り取ったらしい文字が貼り並べてあり、こう読むことができた。

『おとこの再エン 我は執行ス』

おとこの再演と聞いて、誰もがあの2年7組の悲劇を思い浮かべ、そしてそれは間違っていなかった。

一昨年の6月、2年7組の生徒全員と他数名の合わせて40人が一人の生徒によって殺害され、そして犯人もすぐに自殺をした事件だ。

そしてほぼ同じ時、高校の最寄り駅へ向かう電車の中で、とある小さな事件が起こった。

この時はまだ誰も、否ほとんどの人はこれほど悲惨な事件に発展するとは思っていなかっただろう。

## 1 - 1 教科書

「この人痴漢ですっ！」

電車が止まったと同時に、大内椎奈おおうちしいなはそんな言葉を遠くに聞いた。本当に痴漢なんてあるんだと椎名は思い、何気なく視線を声の聞こえた方に向けたが、人が沢山いて当事者を見ることはできなかった。

再び視線を窓の外に移す。

中年の男の人が私と同じ制服を着た女子に引つ張られていくのを見ながら、高校の最寄り駅まであと一駅なのが少し残念に感じた。しばらくすると、電車は定刻より僅かに遅れて動き出した。

### 1：教科書

6月1日火曜日8時20分、相談部室。

「教科書が無くなった？」

教室半分ほどの部屋。

そこで疑問を口にしたのは相談部員一年生の梅田深玖うめだみくで、向かいあう二年生の大内椎奈から相談を受けていた。

「はい。家を出るときは確かに鞆に入っていたはずなのに、学校に着いたらなくなってます」

「家から学校まで、っていうと結構距離ありますよね」

「はい。探すのを手伝ってもらえないかと」

「うーん、ちょっと部長に確認を取ってみますね」  
「お願いします」

深玖は席から立ち上がり、携帯を取り出して部長の井藤雅子いとう ままこに連絡をする。

すぐに出た部長と数回言葉をかわした彼女は、椎奈に顔を向けた。

「その教科書って二年生の現代国語ですか？」

「は、はい」

「それなら事務室の方に届いているそうですよ。良かったですね」

「ありがとうございます」

そう言っ出ていく椎奈を見送り、深玖はノートに今回の相談について書いていった。

日時 6月1日(火) 8:20

場所 相談部室

相談者 2年7組大内椎奈

応答者 1年2組梅田深玖

区分 搜索

内容 登校中に無くなった現代国語?の搜索

期間 即時

解決方法 事務室に届けられていることを確認。

完了済

備考 /

深玖は一通り書いたノートを閉じて立ち上がった。

時間を確認すると8時24分で、そろそろクラスに戻った方がいい時間だ。

部室を出て鍵を締め、遠くから聞こえてくる喧騒に耳を傾けなが

ら校舎内を歩きだした。

事務室で教科書を受け取った椎奈は、ほんの僅かな違和感を感じた。

だがすぐにその違和感は感じられなくなり、気にしないことにした。

「ありがとうございます」

そう彼女は言うてからクラスに向かう。

事務室の人は一年生の男子が届けてくれたと言っていた。

お礼の一つでもしたかったが名前までは聞かなかつたらしく、個人の特定までは大変そうなので諦める事にした。

椎奈は30分の予鈴が鳴ると同時にクラスに戻ってきた。

「教科書見つかった？」

声をかけてきたのは友達の加賀久有美だ。かがひさ ゆうみ

椎奈は頷いて、教科書を机の上に置く。

「うん、事務室に届いていた。誰かが拾ってくれたみたい」

「良かったねー。所でさ、何で現代国語の教科書持ってきたの？」

「え？」

「時間割」

有美に言われて、椎奈は首を傾けながらも黒板横の時間割の火曜日の所を見る。

一時間目、数学。二時間目、物理。三時間目、英語。四時間目、文系選択。五時間目、体育。六時間目、化学。

現代国語の授業は中には無く、現代国語の教科書は持ってこなくてよかったのだ。

今までにこんなミスをすることがなかったため、椎奈は不思議がった。

何より今まで、今日現代国語の授業があると思っていたのだ。

「な、何でだろう」

「一々教科書を持って帰るからそうなるんだよ。置きっぱなしにすればいいのに」

「そうだけど、もし勉強しなくなっても勉強できないよ。それに塾に持っていかなくちゃいけないし」

椎奈は教科書を鞆にしまい、席に座る。

有美もその対面に座った。

「所でさ」

「ん？」

有美が声のトーンを落として小声で話しかける。

「今朝、新聞部に犯行予告文が届けられたみたいよ」

「犯行予告文？」

「何か、紅子ちゃんは見せてはくれなかったそうだけど、尚子が聞き出したみたい」

「へー」

二人の同級の蕨紅子わらびくしは新聞部に所属しており、井伊尚子いいなおこはそんな彼女とまともに会話することのできる人の内の一人である。

有美はたまたま廊下で会った尚子からその話を聞いたのだ。

「私も内容を聞くまでは聞き流していたんだけど、私達に関係のあることだったの」

椎奈は心臓がなぜか高鳴るのを気にしながら、有美の顔をじっと見た。

「『一昨年の再演を我は執行する』っていう内容らしいよ」

「一昨年って、もしかして」

「うん、紅子ちゃんも言ってたみたい。あの虐殺事件だって」

「一体何考えているんだろう、それを送った人」

「本当にね」

二人はそれから朝の会が始まる40分まで他愛もない話をしていったが、その間椎奈の心臓は高鳴り続けていた。



## 1 - 2 生徒会長

「本日より生徒会長となりました東条都靄とうじょうとみやより、就任の挨拶です」

拍手と共に、袖から都靄が舞台上に現れる。

彼は体育館に集まった全校生徒を見回し、軽く一礼すると話し始めた。

「今日より一年間、 高校生徒会会長を務めることとなった2年1組の東条都靄だ。 昨年度は齊藤尊前さいとう ますみ生徒会長の下で副会長として様々なことに関わってきたが、その経験を活かしてこれから活動していきたいと思う。 公約として掲げた5つ、つまり設備充実、予算方針の変更、服装規定の緩和、学食及び購買のメニューの充実、そして生徒の自立機関の設立だが」

## 2 : 生徒会長

6月1日火曜日15時45分、体育館下手袖。

「お疲れ様です、会長」

挨拶を終えて戻ってきた都靄をそう労ったのは、日荒川翠ひあらかわ みどりだ。

都靄はその言葉に気だるそうに返事をする、パイプ椅子に座って頂垂れた。

「何で俺はこんなことをやっているのだろう」

「学校何とか計画のため、ではありませんでしたか？」

翠は都靄の隣に座り直すと、じっと都靄の姿を見詰めた。

ここ最近では生徒会長になるために色々頑張ってきたので、そして実際になれた今、その疲れがどつとでてきたのだろう。

そこで、ふと思いだしたことを告げる。

「会長、今朝のことは聞き及んでいらつしゃいますか？」

「今朝？ 原稿を覚えるので手一杯だったよ」

「そうですね。でしたらお伝えいたします。新聞部より、協力してほしい事があるそうです。この後で来てほしい、と」

都靄は顔を上げ、真剣な眼差しで翠を見返した。

「それは、生徒会長として？ それとも」

「両方のようです」

「分かった、行くよ。この後のことは他の生徒会役員に任せる。北石、任せた」

都靄は立ち上がると、副会長の北石白和きたいし しろうかずに後を任せて体育館を後にした。

新聞部室に到着した都靄と翠は儀礼的にノックをしてから中に入った。

「失礼します」

「いらつしゃいびす」

中はすでに二人が来ることが分かっていたかのように準備が整えられていた。

既に何度か来たことのある都靄たち二人は驚くことは無かったが、初めて来る時は何故と疑問に思う人が多い。

しかしそれはつまり全校集会に出ていなかったということであり、都靄は生徒会長として新聞部の人も全校集会には出てもらいなかったと思った。

勿論、今こうしてやって来たのが悪いのかもしれないが。

都靄と翠はパイプ椅子に腰掛け、対面に座った二人、部長の青梅<sup>あじめ</sup>と二年の蕨紅子<sup>わじびこ</sup>と向かい合った。

「東条生徒会長、まずはこれを見てほしいです」

そう言つて慰夢がテーブルの上に置いたのは、雑誌の文字を切り貼りして作られた文章だった。

「『おととしの再エン 我は執行ス』か。単刀直入に訊くが、これは誰からだ？」

都靄がそう言つと、慰夢はその白い髪を軽く揺らして答える。

「『彼女たち』です」

「そうか」

都靄は頷いて、そして翠を見た。

ここから先はメイドである翠には関係のない話だと判断したのだ。翠はその視線に応え、無言のまま立ち上がると部屋を出ていった。

「それで、新聞部はこれにどう対処するつもりなんだ？」

都霽がそう聞くと、慰夢は首を五度ほど傾けながら微笑んで答えた。

「阻止しますです。その為に東条生徒会長を呼んだのです」

「そうか。それで？」

「これが 高校関係者の『オトシモノ』所有者の一覧です。この四人と接触して、違和感が無いか確認してほしいです。『彼女たち』は私たち『Eslia』に対抗するには、同じイレギュラーな存在ではないといけないことを既に知っているです」

慰夢から渡された紙を見る。

そこには四人の名前と『オトシモノ』が書かれていた。

佐々木萌子『予知』、結城神無『魔法』、夢星宇宙『読心』、渡部耀『テレパス』。

都霽は違和感を感じ取り、そしてそれは『彼女たち』に協力しそうなのが消去法で一人しかいないからだとすぐに気付いた。

そのことが分かっていた慰夢は、更に続ける。

「できれば三人を東条の名の下に協力してもらえるように言ってもらいたいです。事はこの高校だけでは済まないのです」

新聞部長から言われた『東条の名の下に』の意味は非常に重く、都霽はこれが本命であるとすぐに分かった。

都霽は一つ唸る。

「話をする。だが協力については判断材料が少ないから、できない」  
「それで充分です」

都霽は喋る気配のない紅子をチラと見てから立ち上がると、挨拶と共に部屋を出ていった。

## 1 - 3 魔法使い

「魔法の存在、か。それを証明するにはこの世界の文明レベルが低すぎるし、それに存在を証明したところで、大して意味が無いと思うよ?。」

梅田深玖は三年生の結城神無の言葉に耳を傾ける。

「そもそも深玖ちゃんは、魔法ってどんなものだと思う?。」

「えっと、科学では出来ないような超自然的な現象を起こす事ですか?。」

「残念。魔法と言っても自然の摂理の内側でしかないし、そのほとんどが科学で再現可能よ。それじゃあ『オトシモノ』はどうか?。」

「えっと……超能力?。」

「うん、間違いではないよ、間違いでは、ね。」

### 3 : 魔法使い

6月5日土曜日11時30分、結城神無宅居間。

深玖は相談部の資料の中に神無の不思議な力、つまり魔法に関する記述があったので、それが事実かどうか確認するために来ていた。低めのテーブルを挟むように置かれた椅子に二人は座っている。

「魔法、見せてもらえませんか?。」

深玖がそう言うと、神無は立ち上がった。

その目線は椅子に座った深玖と同じくらいの高さだ。

「どんな魔法がいいのかな？」

「こっ、火の玉を掌の上に出す感じで願います」

「分かった」

神無が軽く目を閉じて小声で二言三言呟くと、その前に出した掌の上に火の玉が発生した。

深玖は目を丸く見開いて茫然とする。

「まあ、これくらいは手品でもできるんだよ」

火の玉を消して椅子に座りなおした神無はそう自嘲気味に呟くと、テーブルの上にあるオレンジジュースを一気に飲み干した。

深玖にとっては小さい椅子でも、神無の足は床に着かずふらふらと揺れる。

「い、今のが魔法ですか？」

目の前で何が起こったのかをやっと理解した深玖が聞いた。神無はそれに頷く。

「それで、他に聞きたいことはある？」

「い、いえ」

「そう。それじゃあ深玖ちゃん、これから何か予定あるの？」

「ありませんが」

「なら一緒に昼食食べましょう、ね」

「いいんですか？」

申し訳ない気が一杯の深玖に、神無は無邪気に笑う。

「当たり前だよ。いつも一人だったから、二人で食べられて嬉しいの」

チャーハンにラーメンにお好み焼きにスパゲティーに蕎麦に親子丼。

一体その小さな体にどれだけの食べ物が入るのか、自分が作るこ  
とになったチャーハンだけを食べる深玖は不思議に思った。

「魔法は体力を使うから」

そう言いながら小さな口で蕎麦をすすり、勢いよく飛んだ汁が頬  
につく。

神無はそれを気にせず、椀に残った汁を一気に飲み干した。

「ごちそうさまでした。ありがとう、手伝わせちゃって」

「いえいえ、こちらこそごちそうさまでした」

立ち上がった神無は器用に食器をまとめると、それを流しの中に  
置いて戻ってきた。

そして深玖の側に来るとその顔をジーっと見つめる。

「な、何か顔に付いています?」

そう聞いた深玖に対して神無は首を横に振ると、急に真剣な眼差  
しになって言った。

「深玖ちゃんにとって、これからの事は随分と残酷だと思う」

「え？」

突然の話に訳が分からないといった顔の深玖を無視して神無は話し続ける。

「でも、世の中の善悪はそう簡単に決められなくてもいい。悩んでそれが深玖ちゃんの役目。深玖ちゃんにしか出来ない事だから。辛くなったら佐々木先輩の家に行くといいよ。絶対に助けてくれるから」

「は、はあ、ありがとうございます」

深玖は戸惑いつつも、アドバイスをもらったらしい事を理解して小さくお辞儀をした。

神無はそこで普段通りの笑顔に戻ると、こう言いながら玄関に向かって歩き出した。

「それじゃあ深玖ちゃん、ちょっと待っててね。お客さんがそろそろ来る予定になってるから」

「はい」

生返事をした深玖は神無を見送ると、さっき話された事を思い返す。

これからの事って、これから残酷な事が起きるのだろうか。佐々木先輩はもう卒業した佐々木萌子先輩の事だと思うが、彼女と何の関係があるのだろうか。迷うって、一体何に？

そんな事を考えているうちに神無が背後に人を連れて戻ってきた。休日なのに学校の制服をなぜか着ているその男子は、先客がいたことに多少驚いた様子だ。

「紹介するね。こちら知ってると思うけど 高校の生徒会長で東



条家の長男の東条都靄君。でこつちが相談部の一年生、梅田深玖ちやん。二人ともよろしくー」

「は、初めまして」

「こちらこそ。よろしく」

深玖は突然の生徒会長の東条に驚き、都靄は先客がいたことに驚いていた。

「さて、それじゃあ三人で仲良く話をしましょうか」

神無は明るくそう言つと、椅子に飛び乗るよつに座った。

## 1 - 4 読心

「やっぱり」

例の犯行予告文のコピーが印刷された一枚の紙を前に、結城神無は呟いた。

「やっぱりって、結城先輩は知っていたんですか？」

梅田深玖の言葉に神無は首を横に振った。

「魔法、というか占いの分類に入るけど、結果がさんざんだったのだから嫌な事が起こるだろう、とは思っていた。だけどこれじゃあまるで」

その先の言葉が外に出ることはなく、神無の家は静かになった。東条都靄はカップの紅茶を飲み干すと、立ち上がって言った。

「新聞部がいるんだ。酷い事にはならないだろ」

### 4：読心

6月6日日曜日11時30分、東条都靄宅（東条家別荘）。

なぜか毎週恒例化してしまった東条都靄ファンクラブの会合が、ダイニングルームで開かれていた。

都靄は毎回膨れ上がる参加者に辟易しつつも、場所を提供しているだけなので気が楽だった。

どちらかといえば、毎回準備をする日荒川翠と叶鼎かのう かなえの二人が心配だ。

「都靄、話」

都靄がその声に振り返ると、頭一つ小さい夢星宇宙がシャツの袖を掴んで立っていた。

「ああ」

宇宙から話し掛けてくる事がほとんど無いため驚いた都靄は、シャツを掴まれたまま引き摺られるように別の部屋に移動した。

少年少女が一つの部屋に、というシチュエーションだが、その空気には緊張感だけが漂う。

「私、常都靄味方。超常能力研究所嫌悪、然、反発勢力殊更嫌悪」

相変わらず文面にしないと分かり難い話し方だったが 文面にしては分かり難いが、都靄はそれに頷いた。

新聞部が『超常能力研究所(Extra-skill labo ratory)』、通称『Eslaエスラ』の内部団体であるという事実は一部の人間にとっては常識であり、四条である都靄にとっても当然知るところだった。

一方の反発勢力レジスタンス、正式名称は『人間の能力限界研究会』、は『エスラ』に対抗するための組織である。

都靄は尚も何か言いたそうな様子の宇宙に声をかけた。

「どうかしたか？」

宇宙が視線を都靄と交わらせ、その無表情の中に仄かな安心感を

漂わせた。

「無」

「そうか。それなら、戻るか」

「了解」

一度だけ宇宙は部屋を振り返り、そして出ていく都靄を小走りに追い掛けた。

東条都靄ファンクラブ会長の城ヶ崎浜三日月子じょうがさきはま みかつきこは、先日から噂に鳴り始めた事を都靄に聞いていた。

「つまり、二年前と同じ事件を起こそうとしている人物が学校内にいる、ということなのね」

都靄は一つ頷くと、手元のタマゴサンドイッチをかじる。

「ああ、多分な」

「そうなの」

都靄と三日月子はじつとはしゃぐクラスメイト達を眺める。

その中の一人が、そんな二人の様子を気にして近寄ってきた。

「なーに二人して黄昏てんのよ」

片手で食べ物が山のように盛られた皿を器用に持ち、すきのめ そら杉目天は都靄を挟んで三日月子とは反対側に座った。

都霽が答えあぐねていると、突然三日月子が大きな声をあげた。

「な、何であなたはそこに座るんですか！」

「都霽の隣だからじゃん」

「そんなこと、私が許しません。それにまた貴女は都霽様の事を呼び捨てに。信じられません」

「別にいいよねー、都霽」

「あ……ああ」

左右を女子に挟まれて落ち着かない都霽は曖昧な返事をするように、食べることに集中することにした。

「いつもいつも貴女っていう人は。都霽様！」

「はいっ!？」

突然名前が出てきて、焼きそばを食べようとしている恰好のまま静止した都霽。

「なぜ貴方は無関心に食事をなさろうとしているのですか」

「いやでも天は」

横でカツサンドイッチを食べ始めた天に視線を移した都霽だったが、三日月子はそれを一蹴する。

「今は天さんの事は関係ありません。貴方の事を話しているのですよ、都霽様」

「は、はあ」

「そもそも何ですか、このハーレムは。男一人に女は一人で十二分です。あなたがはつきりしないからこの様な状況に。それなのに

」

あんたが勝手に集めたんだろ、とは言えない都霞だった。

1 - 5 未来予知

「いらっしやい。やっぱり来たんだね」

高校の最寄り駅から電車で十数分、そこからさらに徒歩で数分、東条都靄は佐々木萌子の住むマンションの一室に来ていた。

「失礼します」

「そこに座っててもらえるかな。今飲み物取ってくるね」

都靄はテーブルを挟むように置かれたソファに座った。

萌子は冷蔵庫から冷えた麦茶を取り出してグラスに注ぎ、ポテトチップスを一袋取って戻ってきた。

「どうぞ」

「ありがとうございます」

「どういたしまして」

萌子はそう言って都靄の対面に座った。

「それで、今日は 高校の生徒会長さん直々に、何の用なのかな？」

5 : 未来予知

6月6日日曜日14時30分、佐々木萌子宅。

「ふむふむ。つまり、『エスラ』に反発する人達が　高校であるな事件を起こそうとしているのね。それは、大変だ」

一通りの言葉を聞いた萌子は、そう言って頷くと麦茶を一口飲んだ。

「それで、東条君は私に何を頼みたいの？」

「いや、特にはありません。ただ『彼女たち』と関係がない事が分かれば良かったので」

「そう」

萌子はまた一口麦茶を飲むと、話し始めた。

「まあ、一応東条君には私の『オトシモノ』がどんなものなのか説明しておいた方がいいかな」

都霽は頷く。

「予知。厳密には自身がこれから向かう世界を事前に把握する事、なんだけど世界云々は私はよく分からないからパス。とにかく、予知ね。私の場合とはっても曖昧で、その場でのちよっとした人間の心情を演繹的に演算して予想しているらしいんだね。まあ、結局の所よく分からないんだけど、夢星さんとよく似ているんだよ」

「そうですか」

「うん。そういう訳だから、見たいものが見られる訳じゃあなくてね、いつもとは違ったシチュエーションになる時によく見るんだよ」

そこで萌子は麦茶を飲むと、気分を変えるように少し大きい声を出した。



「まあ、私の話はここまで。それで一つ聞きたいんだけど、『彼女たち』って一体何なの？」

都霽は一瞬固まった。

今まで萌子が『彼女たち』の事を知っていると思っていたのだ。

「佐々木先輩は、『彼女たち』の事を知らなかったんですか」

萌子は中途半端に笑いながら頷く。

「私はあんまり新聞部、『エスラ』とは関わって無いからね。名前くらいしか」

「そうでしたか」

都霽はいつの間にか前屈みになっていた体を戻すと、咳払いを一つしてから話し出した。

「『彼女たち』、つまり『人間的能力限界研究会』通称『能限研』に所属していると思われる。高校の生徒の事で、証拠は無いんですが以前から何度か犯罪紛いの事をしている人たちです」

「へー。まあ、もう私は 高校の生徒じゃあ無いから詳しくは聞かないけど、目的って何なのかな」

「『オトシモノ』への復讐だ、と言われてます」  
「そっか、復讐ね。まだ若いのに」

萌子は両手を組んで伸びをする。

「あ、私も若いのか」

そして小さく笑うと、腕を下ろした。

窓の外を見た萌子は、雲行が怪しくなってきた事に気付いた。

「明日は雨かな」

その言葉に後ろを振り返った都霽は、灰色の暑い雲が一面を覆っているのを見て頷いた。

「でしょうね」

「何と無くだけど、嫌な感じだね」

都霽は無言でもう一度頷く。

どこか遠くから雷鳴が聞こえてきた。静かな部屋から眺める窓の外的光景は、どこか現実感がない。

「雨も降りそうなので、この辺で失礼します」

都霽はそう言って立ち上がると、玄関まで出てきた萌子に見送られながら帰っていった。

居間に戻ってきた萌子は後片付けをしながら、一つ大きく溜め息を吐く。

「これは、二年前よりも酷いよ」

萌子はもう一度溜め息を吐くと、キッチンに移動した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1419m/>

---

オトシモノ

2010年11月12日07時22分発行